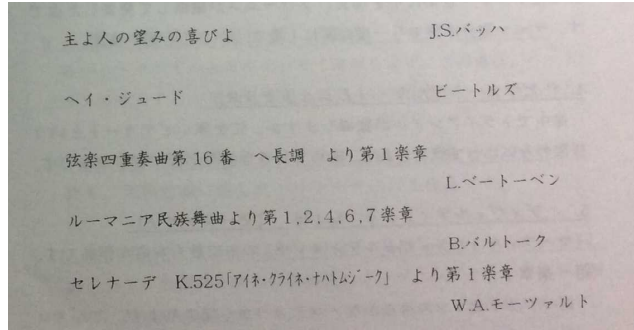


◆ ポテンシャルは∞（無限大） ◆

子どもたちの潜在能力の高さに驚いたことがある。

かつて勤務していた高校で、何気なく「来年は、ベートーヴェンの弦楽四重奏をやってみれば。16番は深いよ…」というような話をした。創部したばかりの部でもあり、多分難いだろうとは思っていた。しかしながら、第1楽章のみではあったが、翌年彼らは見事に演奏したのである。



（当時の定期演奏会のパンフレットの一部）

すでに私は違う高校に異動しており、その学校の弦楽部顧問という立場を離れていたのだが、これには本当に驚いた。

楽聖の最後の弦楽四重奏曲。最終楽章にMuss es sein? Es muss sein!（かくあらねばならぬか？ かくあるべし！ などと訳される）と書き添えられ、これをどう解釈するかな、ということに密かに期待していたのだが、外されてしまった。しかし、立派な第1楽章だった。

さて、11月に県吹奏楽連盟のアンサンブルコンテスト県南大会があり、本校からも3団体が出場した。感染防止の観点から原則無観客だが、聴くことができた。ありがたい。

その中の一つ、フルート・クラリネット・アルトサックスの木管三重奏。冒頭のユニゾンから驚愕した。楽器固有の音を極力抑えている。それくらい溶け合っていた。どんな練習をしていたのだろう。

曲は『見えない鳥たち』（田村修平）。時折ストラヴィンスキーのような響きがする。フルートとアルトサックスのエスプレッシーヴォは良く歌っており、クラリネットは終始安定した演奏を繰り広げた。若干強弱の差が少ないかな、とは感じさせるものの本当に立派だった。これは上位入賞を狙えるだろうと思っていたところ、果たして見事に上位での県大会出場となった。



県大会当日も素晴らしい演奏であった。2年生3人のアインザッツは良く揃っていて、ブレスも当然そこで入るだろうというポイントでとっていた。ダイナミックレンジも広がっていた。作曲者の田村さんは楽譜の扉に「それぞれの心の中に生きる鳥を、（中略）素直に感性で受けとめ、想い思いに表現していただけるのであれば、作曲者として幸いである。」と記している。彼女たちの「感性」は本当にフレキシブルであったなあ、とこの演奏を振り返って思う。

上位大会には繋がらなかったけれど、冒頭に触れた例も含めこういう演奏を聴くたびに、子どもたちの潜在能力は無限大と思うのである。そして、こんな子どもたちに出会えてとても幸せになる。

実は県大会2日前に彼女たちの演奏を聴き少しコメントしたのだが、3人とも楽器は中学1年で始めたとのこと。どんな演奏者が好きなの、と尋ねるとそれぞれにっこりと笑ってお気に入りのプレイヤーの名前を教えてくれた。忘れられない時間になったよ、ありがとう。